

Open(Source)ing the Doors For Contributor-Run Digital Libraries

オープニング(ソース) ザ ドア コントリビュータによるコントリビュータの ためのデジタルライブラリ

Paul Jones

もしも、魔法の杖を一振りして理想のデジタルライブラリ（オープンで管理しやすく低料金、しかも選択肢が多くて民主的...）がつかれるとしたら？ もしも、コンテンツのコントリビュータが自分自身でライブラリ内の資料の提示、一覧化、索引付け、管理、レーティング、ランク付けなどをできるとしたら？ オープンソースやフリー・ソフトウェアの概念に基づくコミュニティの出現により、コントリビュータによるライブラリの直接運営は、決して夢ではなくなっている。

実際いくつかの成功例がすでに存在し、そこから運営の最良の方法だけでなく、(プログラマの究極の目標である)動作中のコードをも引き出すことができる。こうしたプロジェクトは、生き生きとしてやる気にあふれ、また騒がしくもある民主的なコミュニティの具体例でもある。コントリビュータ運営のライブラリはまず、人々に貢献を求めることに始まる。当たり前のことのように聞こえるかもしれないが、はじめから管理しようとしたり、また保護しようとする姿勢で構築されるライブラリがとても多い。1992年に開始した我々と Linux Software Archive (MetaLab.unc.edu) とのプロジェクトでは、提出されたソフトウェアに対する障壁をできる限り取り除き、認証プロセスを簡単にすることにした。そうすることにより、高品質のソフトウェアは、ほぼリジェクトされることなく受け入れられ(そして、配布される)ことが可能となった*1。提出されたソフトウェアは、まずセキュア・エリアに簡単にFTPアップロードされ、ソフトウェアとは別

に"Linux Software Map" (metalab.unc.edu/pub/Linux/LSM-TEMPLATE) というベーシックなメタデータの提示を求められる。制作者やタイトルの確認、またソフトウェアに関する記述をするためである。項目はもともと12しかなく、要求されるのはその中のたった4つにすぎない。このため、世界中からたいへん多くの提出量があるにもかかわらず、メタデータの欠如や不適正によるリジェクション率は4.5%と低くなっている*2。

このLinuxとの経験により、ソフトウェアの自由提出にオープンな姿勢を見せることは、考えていたよりも危険性のないことがわかった。もちろん、もともとデジタル・ライブ

*1 MetaLab Linux Software Archive と Contributor demographics についての詳細は、<http://metalab.unc.edu/orst/developro.html> を参照

*2 <http://ils.unc.edu/~janeg/lsmstudy> の L.Greenberg によるドラフトレポートを参照

ラリは現実の図書館と違い、棚のスペースの問題などを抱えることはない。しかし、コントリビュータが直接提示する、メタデータとアテンダント・オーガナイゼーション・アシスタンス (Attendant Organizational Assistance) が信頼できるだけでなく、利用性が高いという事実は励みとなっている。

しかし、他のコントリビューション (寄稿物) にコメント付けやランク付けを行うコントリビュータを奨励することは、騒がしくも活発で民主主義的なコミュニティが発展し、成長するために好都合な環境をつくり、大きな価値を加える、と気がついている人たちがいる。

米国大手の書籍卸業者、Amazon (www.amazon.com) や Barnes and Noble (www.bn.com) は、売り物の本に対するユーザーのコメントや、そのコメントに対するコメントをもとに、評価のランク付けを行い、商品に新たな価値を与えている。

また、Slashdot.org (www.slashdot.org) のようなサイトでは、よい評価の下されたコントリビュータやコメントには報酬としてカルマポイントが加算され、ディスカッションの進行役の権利、また掲載コメントや記事に対するランク付けのできる権利が与えられる。つまり、このような仕組みにより、サイト自体は質の低下や、乗っ取り、偽造などの悪要因を避けられるようになっている。

ほかにも Advogato's trust metric (www.advogato.org/trust-metric.html) など、各提出物の評判を査定する、洗練されたシステムが存在する。こうしたシステムにより、意味あるランキングや評価を可能にする、強固で信頼のおけるコミュニティが確立するのである。例えば、ライブラリのコントリビュータや読者に、査定やランク付け、そしてコレクションを管理するツールへのアクセス権を与えたとしよう。それは、ただ単にライブラリ構築側の仕事を減らすだけでなく、知的な論議を行うコミュニティを構築していることになる。つまり、評判や信頼度によって、コミュニティの強力なメンバーが承認さ

れたり、承認された者にはある種の特権(報酬)が与えられたりする。^{*3}

デジタル・ライブラリ自体も同様にコントリビュータに恩恵を返すことができる。集められた情報を共有することにより、コントリビュータはどのアイテム (原稿、歌、ソフトウェア等) がトップ 10 リストにランクされており、どのアイテムが推奨されているかがわかるからである。これは、参照するサービスの品質を高めるというだけではなく、新米のコントリビュータが、何がよいものであるか理解するための手助けとなる。

例えば、オープンソフトウェア開発者のための SourceForge (sourceforge.net) のような、コントリビュータのためのより洗練されたサイトは、それ自体でうまく機能するためのツールを提供している。

ここでいうツールとは FTP、Web ホスティング、リスト・サービス、プロジェクト・ステータス・ページ、バージョン・コントロール・ソフトウェア、バックアップ、ディスカッション・フォーラムなどを含む、開発者にとって障害物の除去に役立つものである。こうしたツールを提供することにより、SourceForge はたった数か月の間に、世界でも有数のオープンソース・プロジェクトのコレクション・サイトにのし上がった。また、SourceForge は昨年秋、新たにコントリビュータ用の Advogato's trust metric を加えた。つまり、SourceForge そのものは、開発者を対象としたサイトであるにもかかわらず、開発者側のニーズはメディアやジャンルを超えて、次第にコントリビュータに近くなってきていることがわかる。

なぜ、SourceForge が、とりわけデジタル・ライブラリ・プロジェクトにとって興味深いかといえば、ほとんどのツールがオープンソースであるだけでなく、無料で提供されているからである (Free Software Foundation's General Public License^{*4} 認可による)。公共図書館の伝統に基づき、SourceForge 内のツールや、サイトそのものはシェアリングが可能で、ローカルあるいは特定の環境に向けて構築・調整されたものである。ここで利用されるツールやコンセプトは、活発でにぎやかなコミュニティにとって有用かつ効果的であることがすでに明らかで

^{*3} インターネットの環境における評判の源泉の議論については、http://www.firstmonday.org/issues/issue3_3/ghosh 参照

^{*4} The Free Software Foundation におけるライセンスについては、<http://www.gnu.org/philosophy/license-list.html> 参照

ある。つまり SourceForge は、リアルで効果的なツール・コレクションにとどまらず、民主的感覚に富んだリアルで効果的なコミュニティ構築を行っている。

オープンソース・ツールのみでなく、コミュニティ内の相互交流や、コントリビュータの参加を促すオープンソース哲学を取り入れることにより、デジタル・ライブラリは、伝統的なサービスの改善と同様に、コミュニティに

とっての新しい地平線を切り開くことができるのである。

Paul Jones(pjones@ibiblio.org):North Carolina at Chapel Hill 大学と the Center for public domain の共同プロジェクトである ibiblio.org の責任者である。

訳：木俣豊(独立行政法人通信総合研究所)